

# 松下幸之助記念財団 研究助成 研究報告

(MS Word データ送信)

**【氏名】**

三樹 陽介

**【所属】(助成決定時)**

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員

**【研究題目】**

消滅の危機に瀕する八丈語の談話資料作成  
—記録・保存と、継承活動に役立てるために—

**【研究の目的】(400字程度)**

本研究は、ユネスコにより「消滅の危機に瀕した世界の言語」の一つに登録された八丈語（八丈方言）を調査・記録するとともに、自然談話を録音して収集し、音声データベースとして整備することで談話資料を作成するものである。

八丈語は古代日本語の特徴や、他の方言では既に失われてしまった言語体系を維持しており、本土方言と対立する言語として価値が高いものである。現在、八丈語の話者は70代以上に限られており、500人程度とみられている。しかし、十数年もすれば話者は半減し、継承は難しくなり、言語の維持は極めて危うくなる。言語が消滅することは、地域の文化やアイデンティティが失われることにほかならない。このような八丈語を、話者が十分に確保できるうちに緊急的に調査し、記録・保存することが本研究の目的である。

言語の保存には辞書・文法書・談話資料の3点セットが必要だが、八丈語には金田章宏氏による優れた文法記述がある一方で、談話資料や録音資料はまだ少ない。本研究は、八丈語の音声付き談話資料を作成することによって八丈語の保存に貢献しようとするものである。

**【研究の内容・方法】(800字程度)**

八丈島には三根、大賀郷、樫立、中之郷、末吉の5つの集落がある。助成期間内に島内全域を隈なく調査することは困難であるため、このうち島の中心地である三根で自然談話を収集した。三根はほかの集落に比べ先行研究の資料が多く、教育委員会からも近く、話者の確保も容易である点で、最初の調査地にふさわしいと考えて重点的に調査を行なった。このほか、フィールドワークに基づく聞き取り調査も行ない、八丈語の現在位置や言語変化等を観察・記録した。

談話資料は、収集した音声データにテキストやアノテーションを付与して整備する（標準語訳、注などを修正、決定する）ことで作成する。作成手順は以下の通りである。まず、現地に赴き、三根を中心とする地域（隣接する大賀郷でも調査を行なっている）で3泊4日程度の調査を繰り返し行なった。申請者の司会で2~3名の話者による30分~1時間程度の談話を複数録音した。次に、それらを文字化する作業を行なった。収集した音声を文字に起こし、標準語訳や注、アノテーションを検討し、草稿を作成した。続いて、テキストの精度を高め、アノテーション付与を正確に行なうために、話者に録音した音声を聴いてもらいながら、修正作業を行なった。また、必要に応じて話者による付加説明を注としてつけた。連日、同一の話者に協力を求めると話者を疲れさせてしまうため、午前と午後とで別の話者に調査を依頼し、短期間に複数名調査するという手順を繰り返した。

現在、音声データと文字化テキストとをリンクさせた談話資料を作成・整備中である。また、作成した談話資料から語彙と用例とを収集する作業も行なっており、談話資料を基とした語彙集を作成中である。完成後、Web上で公開することを目指している。

## 【結論・考察】（400字程度）

現在、音声付き談話資料の公開に向けて整備作業中であるが、作業過程でいくつか明らかになった点もある。特徴的なものとして、待遇表現の変化があげられる。1980年代の先行研究との比較から、当時の調査で既に古い表現とされ、あまり使用されない傾向にあった「オジャリータソワ」形が現在では最も丁寧な形として現れ、目上への待遇表現として頻繁に使用されるようになっていることがわかった。同時に、他の待遇表現の丁寧度が下がり、同じ待遇関係の相手であれば、かつてのより丁寧な言い方で表現する方向へ移行していることがわかった。このほか、調査から集落ごとの音声的特徴も垣間見られ、他集落で同様の資料を作成する必要性があることが確認できた。本研究で作成した談話資料を、今後、質・量ともに拡充していくことで、さらに音声的にも細かい分析に対応できるものとして発展させていくことを目指したい。

本研究で作成した談話資料の公開は、危機言語保存に新しいモデルを示すことができるを考える。このような資料には様々な利用価値があり、学術研究に大きく貢献するほか、一般公開することで、方言教育の教材への活用や、方言継承活動にも役立てることができる。ユネスコの発表を機に、八丈町では教育委員会を中心に八丈語の継承運動が盛んとなっているが、こうした地元の取り組みと連携協力することで、八丈語の消滅を遅らせることにも寄与できる。また、将来、仮にネイティヴの話者がいなくなったとしても、八丈語の再建の基盤とすることができます。こうした意味で、本研究はグローバル化の中で失われつつある地域の多様性をとどめ、多様な文化を維持することに資するものといえる。